Non Fiction A
ノンフィクションA
［第18回］

48インチを世に出した二人の男

15年前に長尺化を先駆けた竹林隆光と櫻木博公

昨年末、惜しまれつつこの世を去ったクラブ設計家・竹林隆光。彼の功績の一つとして48インチの長尺クラブを世に出したことが挙げられる。当時、竹林とともに開発に携わった櫻木博公が48インチ誕生秘話を語った。

今年発売されるドライバーの長さはいったい何インチくらいか、ご存じだろうか？　数年前までドライバーの標準的な長さは45インチだった。ところが近年のニューモデルはほとんどが45インチ台の後半。46インチ以上のドライバーも増えてきた。もはや45インチは標準ではなくなってしまったのだ。

こうした趨勢を見るまでもなく、ドライバーの長尺化は大きな流れとなっている。その流れを作ったのが、じつは2人の男だった。

竹林隆光と櫻木博公。

竹林については改めて紹介するまでもない。株式会社フォーティーンの創業者であると同時に日本を代表するクラブデザイナーとして数々のヒット商品を世に送り出してきた。昨年の暮れも押し迫った12月27日、心不全のために亡くなった。享年64。

彼が設計したクラブは「タラコ」

櫻木博公（さくらぎ・ひろたか）、69歳。畑違いの商社マンからクラブ開発の世界に飛び込み、竹林とともに48インチを世に出した。左手に持つのが15年前のSWAT、右手に持つのが現在のネクスジェン

取材協力・株式会社ゴルフパートナー、ユニバーサルゴルフ社、苔縄和裕　取材、文・高橋健二　撮影・福田文平

と呼ばれたインテストLXなどのプロギア製品を始め、ヤマハ、パワービルト、マグレガーなど枚挙にいとまがない。その設計思想は、一部の才能ある人だけでなく、いかに多くのアマチュアに使いやすく、やさしく打てるかだった。

竹林デザインのヒット作である中空アイアンやユーティリティクラブはもとより、長尺ドライバーもその延長線上にある。

竹林さんの訃報を聞いて涙がとめどなく流れた

竹林隆光（たけばやし・たかみつ）、享年64。設計家として有名だっただけでなく、日本オープンでローアマになるなど、プレーヤーとしても一流だった。人格者としても知られ、亡くなる直前にフォーティーンの社員一人一人と面談したという

「竹林さんの訃報を聞いたとき、私はラウンド中だったのですが、しばらくしたら涙がとめどなく流れ出て、ただ茫然としていました」

そう語るのは、櫻木博公である。兵庫県出身の69歳。もとは商社マンだった。

「私はもともとユアサ商事という商社で建設機械などの輸出に関わっていたんです。ところが80年代後半に超円高になり、89年に輸入部を創設、その初代部長になって輸入クラブを扱ったら2年間で年商70～80億を稼ぎ出した。その過程で関西のクラブ組立工場から、会わせたい人がいる、と紹介されたのが竹林さんでした」

櫻木はほどなくしてスポーツ専門事業部を新設、それを発展解消してユアサゴルフを設立する。ときあたかもバブル景気の真っ只中。セイコーやシチズン、キヤノン、リョービなどの異業種が続々とゴルフ業界に参入した時期である。その新しい事業部で櫻木が取り組んだのが長尺ドライバーの開発だった。

「長尺の商品化を最初に打ち出したのはユアサ商事の湯浅輝久会長（当時）でね、会長が山口敏夫代議士（元新自由クラブ幹事長）とテレビ対談をした際に、小柄な山口さんが61インチのドライバーで飛ばしていると聞いて刺激され、自分用に『61インチ以上のドライバーを作れ』と言い出したのが、そもそものきっかけなのです」

だが一口に長尺化といっても、シャフトメーカーには61インチ以上のシャフトを焼ける窯がない。やむなく櫻木は釣り具メーカーに頼み込んで長尺シャフトを作ったのだった。

「できたのは63インチのドライバーでした。ヘッド容積309㎤、ヘッド重量181g、バランスHで、シャフトが途中から湾曲してましたけどね」

自分専用の長尺ドライバーを手にした会長はいたくご満悦だったが、すぐ新たな指示を出した。「もう長尺の時代だろう。だったら市販用ドライバーでも長尺を開発しなさい」

こうして櫻木は、知り合ったばかりの竹林を頻繁に訪ねるようになる。

飛ばすためには長さがいる――竹林はシャフトの長尺化の必要性を、30年以上も前のパーシモン時代から主張していた。

「長くすればヘッドスピードが上が

る。スイングプレーンが波打たない。アッパーに打ちやすい、と飛ぶ条件が増えるのです」

だが、長尺にすればクラブは重くなり、振りきれなくなる。言い換えるとクラブの長尺化には「振れる範囲で」という条件がつく。それが軽量カーボンシャフトの登場やチタンヘッドの採用で設計しやすくなった。

竹林は、すでにこのころ長尺ドライバーの設計を着々と進めていた。ただしそれは、他社に売り込むため

開発を進めていた竹林と社命を帯びた櫻木の思惑が一致した

だった。だが、持ち込むとどのメーカーからも断られた。やむなく自社ブランドで出そうかと考えていたところに、会長直々の命令で長尺の開発に取り組んでいた櫻木が現れた。両者の思惑はたちまち合致し、開発は一気に進んだ。櫻木が述懐する。

「ヘッドの重さ181g、総重量279gにして、私が自分で振ってみて、振りきれたのが48インチの長さだった。で、48インチのシャフトを三菱レーヨンに依頼し、46本の試作シャフトを作ってもらった。その46本目を採用したのが、1998年にフォーティーンから発売されたゲロンディです。私は追加でもう1本作ってもらい、その47本目を使ってスワットを3カ月遅れて発売したのです」

写真左がユアサ商事が発売した48インチ長尺ドライバー「SWAT MD 2001 Ti」

それまでの常識を打ち破る長尺ドライバーの出現は、ゴルフ雑誌などでも「飛ぶクラブ」として大きく取り上げられて話題を集めた。

実際その飛びは想像を超えていて、ゴルファーの間でも噂が一気に広がった。片山晋呉が長尺を使って初優勝したことも話題になり、やがてショップの店頭は長尺一色といっていいほどのブームになったのだった。

後にUSGAとR&Aは長尺化に歯止めをかけるため、クラブの長さを規制することになるが、その際にルールブックに明文化されたのが「48インチを超えないこと」だった。ゲロンディとスワットが、クラブの長さの基準となったのである。

だが、ブームはあっという間に去った。

「なぜか？　長尺にすると重くなるから、ヘッドスピードの遅いゴルファーには振れない。にもかかわらず誰でも飛ぶと思って、振れない人まで買った。結果、思ったほど飛ばないとか、真っすぐいかないという不満をいう人が増えた。一方メーカーは、本来長尺専用に開発したシャフ

トでなければ振れないのに、ただ長くして出すところも出てきた。これで長尺の評判がガタ落ちしたんです」

櫻木の述懐だが、竹林は別の見方をしていた。

「タイガーが出てこなければ、長尺ブームはもう少し続いていたかもしれません。タイガーが出て42・75インチのドライバーで飛ばして、飛距離は長さじゃないという流れを作った。短いほうがシャープに振れて飛ぶ、と。これで短尺ブームになり、とどめを刺しましたね」

以後、長尺は人々の脳裏からすっかり忘れられてしまった。

二人が世に出した長尺がいま再び脚光を浴びる

櫻木はその後、ユアサ商事がゴルフ事業から撤退したのと時期を同じくして退社した。そして新しく会社を興すことも考えたが、胃がんが見つかって手術。2005年からゴルフパートナーの顧問となって現在に至っている。

一方の竹林は長尺が下火になったあと、フォーティーンで発売したウエッジ「MT-28」が大ヒットするなど自社製品の製造販売に乗り出し、量よりも質にこだわるクラブメーカーとして確固たる地位を築く。

2人はまったく別々の道を歩きながら、それぞれが理想とする長尺ドライバーを追い求めてきた。それがここにきて再び花開こうとしている。

「ドライバーに求められるものは何かといったら、第一に飛距離。飛距離を求めないゴルファーは絶対にいない。だったらクラブデザイナーにはその要求に答える義務がある。だから私がドライバーを設計するときの条件は、まず飛距離ありき、です」

生前、そういってはばからなかった竹林は、昨年11月に長尺の第2弾としてゲロンディCT-214ドライバーをフォーティーンから発売した。長さはルールぎりぎりの47・75

当時、ALBA 本誌でも48インチ長尺ドライバーの特集を掲載。長尺のオーソリティとして竹林の出演回数も増えた

こちらは竹林が自らのブランド、フォーティーンから出した「ゲロンディ」。衝撃的にデビューするとともに、竹林の名を世に知らしめた

チイン、ヘッド容積450㎤である。

「初代ゲロンディのときはヘッド容積307㎤が限界だった。当時は振りやすくするためにヘッドを軽くしたが、結果、打球が軽くなり、アゲインストでは44チインと同じくらいまで距離が落ちた。その反省に立ち、新しいゲロンディはヘッドを重く、バランスもD6～D7にして、なおかつ最適重心位置を追及した。芯に当たってエネルギー効率のよいクラブに仕上がっています」

竹林が本誌記者に語ったこの言葉が、いまとなっては遺言になってしまった。

対する櫻木は、ゴルフパートナーで06年に発売したネクスジェンの立ち上げから開発に関わってきた。この2月、5代目となるネクスジェンのタイプ440と460を新発売する。

櫻木は自ら「長尺の伝道師」というほど長尺にこだわってきたが、今回のドライバーは、いまや標準といえる45・75チイン。なぜルールぎりぎりまで長尺にしなかったのだろうか。

「48チインは作ろうと思えば作れる。ドラコンプロたちに供給しているドライバーは48チインです。でも48チインを振りきるには技術とパワーがいる」

だがその分、長尺の開発で培った「飛び」へのこだわりを十分に生かした設計になっている。

Non Fiction A
ノンフィクションA

長尺開発で培ったノウハウを新発想のシャフトに生かす

69歳の現在になっても、クラブ開発への情熱はいささかも衰えない櫻木

「第一に、ヘッドを効かせるためにヘッドを重くするのではなく、グリップを20g軽くした。ただバランスが重すぎてシャフトが柔らかくなると、今度は振りにくさが出る。これを解決するのに手元側の剛性を柔らかくして、シャフト中間部の剛性を上げた。これはドラコンプロからのアドバイスをヒントに考えたのです」

このメリットは、まさに長尺開発の経験から生まれたものだ。結果、ドラコンプロとヘッドスピード37m/sの櫻木が同一のスペックを振っても同じようにヘッドが遅れずに下りてくるドライバーが完成した。

15年前に一世を風靡した長尺ドライバー。それが再び、進化したシャフトとヘッド、そして過去の反省を教訓にした新たな設計思想を伴って新しく登場した。竹林は、ともに長尺を語り合った櫻木を、いま天国からどんな思いで見ているのだろうか。

（文中敬称略）

竹林が再びルールぎりぎりの長尺を世に問う「ゲロンディCT-214」（上）と、櫻木が持てるノウハウを注いだ「ネクスジェンTYPE460」